活語新論

ホ2
453

全

ホ 2
5617

5617

藤原淑蔭大人著

活語新論

全

江戸書肆 玉山堂

活語新論序

夫人雖曰萬物之霊。非言語無以視其為霊也。然則言語亦霊妙哉焉。況我 皇國之言語。平易直達。支那人亦譽之云。其他之蠻夷。悪有足企及焉。彼言霊幸國之稱。信有所以焉。況又活用之多端。皆是自然之活用。而凡人之智有不可測者。然彼詞瓊綸。八衢等之撰者。皆欲強究

其霊妙然不能必合三轉四種之常格。而以不合難為訛言者。設以變格之目。斯誠困難之説。誰許曰穩妥之釋矣。榧亭氏疑此久矣。頃有所得。以為印定者却不可以為霊妙。因以考彼此不可強解者毎毎有之。終録以為一篇。名曰活語新論。以著難解之中自有不測之神理備焉。學者若先得此書之意。而後攻古言。於彼活用之例。當免牴牾之累矣。書成需予言。予素雖不識古言。嘗已知榧亭氏精於斯。乃又此書之精覈不足贊辯也。遂不揣固陋。書之以為序。

文久三年癸亥孟春吉

川越　奚疑齋侗翁識

学問の虚実といふことを論ずる人
のいふを聞ば源氏物語をよくよく
もみずたゞ筆のすさびにて古
物語つくりなしたる偽りもの
かりそめの書籍と心得て古の
ことをさくいはむとして今の真
かるくみての情さまとし洗ふの
おもひなることおろかなる

於まつき心あるやかんけにゐよ
縦み世の櫻亭のことし或は
活字新編と云る書としも去れ
一巻として例ありいさとしてなるいふ
例の活字本印しと思ひつゝ
てゆくまゝ言の羽つひゐとぬは
しられて余思ひよりあへり
ふなんやれをいふて赤色ゆ

楮りおし文生堂主の此りを
さきにはまとい性ぞさしむ
まゝになりわれ人ちし書とぞ
ある者おもはきのくせあり
ひとりのすとうそのあたり
の性をしてし書すゝのふ

文久二年八月　松亭主人戯

活語新論

藤原淑蔭著

言語の活用ハ。五十連音（イツラゴヱ）の第一音より。第四音まで活轉する一種。或は第二音より第三音に活轉して。其三音に畄礼を添る一種。或は第四音より。第三音に泝（サカ）りて。其三音に畄礼を添る一種。或は第二音に畄礼を添る一種。是を四種の活用と云。かくて其四轉ハ第一音にていはゞざ語をなせば。譬ば行をゆかと云類ひにて。受辞のんず等にて。ゆかんゆかずを調て。将然言となるが如し。第二

音ニ轉て。ゆき連用第三音ゆく截断と連躰とを兼ぬ。第
四音ゆけ已然と使令とを兼たり。已然ハ何の活なるも古曽の結辞。連躰ハ曽
也加等の結辞。截断ハ波毛等の結辞なり。此四轉をカサタハマラの六行ニ有り。又第二第三の
二轉ハ譬バ老も第二音れ以連用。んず等を受て将然。使
令ハ第二音ニ與を加ふるなり。此格カタハヤラワの七行ニ有り。又第
四音より第三音ニ登る二轉ハ。譬バ誉え第四音ほめ連
用。んず等を受て将然第三音ほむ截断。留を加へて連躰。
礼を添て已然。使令ハ第四音ニ與を加ふるなり。但与の添ざる
も有り。此格アカサタナハマヤラワの十行ニ多く有り。又第二音無轉の活用ハ。
譬ハ見え。み連用。んず等を受て将然。留を加へて截断と

連用とを兼ぬ。礼を添て已然。使令ハ第二音ニ與を加ふ
るなり。此格カナハマヤラの六行ニ有り。此四種を活用の大躰なり。其他
しくきしくしきき変格等の活用有り。今世語格を云輩
是を定則なれバ。此事下ニ辨ふるを見るべし。但し如此云へバ。此仮初の覡
則ぢニ心得まバ。千言萬語其用活も。大方知らるゝやう
なれども詞の活用ハ以多く奇しく靈しき物にて。上ニ
挙たる常格にて。盡く其意を推究るにハあたはず。其詞
をかおくく論たむニ。立も四段タチタツ タテタツハ自然。下二段タテタツル タツレタテハ
令然なるを。折ハ四段ヲリヲル ヲレも令然。下二段ヲレヲル ヲルレハ自然ニ
て立とハ其意表裏なり。思學も四段シビシベ シブシベ。マナビ マナブ中二段

ウムウミウメ。マナブマナビマナベ等二タ方に活て。異なる六等無く。埋も四段（ウム ウメ）別にて自他を兼させ。詞八衢に今然を下二段等して挙させるを誤なり。又うめ等云詞ハ同語のやうにふ等聞ゆれど。うづめハ物を埋蔵に云うめも陷凹を充實にするを云て別語なり。活きバうづむとも埋。うめハ塡の意なり。六も活用に拘りさる六等限も中あらねど。ふと思ひ出さるまゝ。聊釋へ訪ふなり。

二段（ウミ ウム ウメ）のうちにて。四段（ウミ ウム ウメ）に活さる例なく。賜ハ他の上に云ハ四段（タマハ タマヒ タマフ タマヘ）何なるを敬ひて自ガうへに云ふも下二段（タマヘ タマフ タマフル タマフレ）なるも。但四段なるも古くも後にもをりく見えさるも。又のたまふと云詞も皆賜の意にて。他の上に云詞なるをまれには自のものさまを云さるも有るも源氏物語帚木巻に「何祿なる人にのさまむ見む」同書賢木巻に「うちしのせぶしのさまむにきゝそべらば」ぶど有り。我ガ云をのさまふと云むハ理ゆゑのどなるやうなれど。敬語を自のうへに云と分て四段（ワク ワケ）下二段（ワク ワケ）て。先の人を敬ふハ前と同じ

（ワレ ワル）二タつさの活語にてをらまし」同書秋下「とびて古今集冬「いづれをうめとてきき人のてきてゐちよ家木のもとにあど心の上に云ふえ四段のうさにてきと云同書雜下「雪ふえてけてきえを見むとえ」續後撰集秋上「はを鹿のむぬてるにすろ何きの恋えら」されらハ葉につきさるかさにて下二段にてけと云り除ハ四段（ヨカ ヨキ ヨク ヨケ）中二段（ヨキ ヨク ヨクル ヨクレ）下二段（ヨケ ヨク ヨクル ヨクレ）と三ツに活けり。はて四段と中二段とを彼方へ依らド等するにて避字に當り。下二段ハ此方へ依せド等するにて防字の意なり。よき等第二音に居てると。よけと第四音に云との別何ぶを思ふ也し。野憂譬味なる等を八衢に不審しされど。是らも中二段。下二段。二タつさに活て意も聊差別何るへきを八衢に「中二段と下二段とに活きて同じ意なるもの例なし」と云れど萌を續日本紀に毛延と書き。萬葉

集に孫枝(ヒコエ)も伊都追(イツモ)とあるを見れバ。也行中二段と下二段とに活さるなり。又山口栞に。かれひハおれのれ心にあかき事のあるを云詞。かれへえ心にあまる思をうち出てかなしみ人にすがりてかさふるやうのことをいふ詞どもかれさるかなもかもえるゝなり尚よく考ふべしとあるもよく意を着けさる説なり。案に野味譬なども中二段ハ其れもむき狭く深く。下二段ハ其はま広く浅し。さど其緩急にちりて分れさるものにて。深きゆゑゐるにぞあらざるべきなり。阿久留(アクル)と云詞ハ。下二段アケ アゲなり。夜に云みきハ自然。戸鎖(トザス)などに云ときハ令然なり。猶挙て数ふるうらバ。如此(カク)自他ともに同じ活(ハタラキ)なるなり。自他により て活の異なるなり。二(フタ)つさに活て意の異ならバなりま意ハ同じくて二(フタ)つさに活くなり。二(フタ)つの活なるが互にいれ換りて。自他を異にするなりま。同じ活なるも其物

に依りて自然と令然と違へるなど。ものくに理(コトワリ)など推(オシ)て定むべき業にあれバ。熟(ツラツラ)考るに言語の活用のみならバ。大に定はる物ハ極まるこそもなく。星のやどりハ天津日に先だち。月も日に後れて。其行道少(スコシ)く同じからばれども。天壌無窮(アメツチトコシヘ)に四時の違ハばるハ。大塊の大に定まるところなり。此天經を初め。両間に行ハるゝ物。何(イヅレ)か此趣を離るゝこどの有らむ。人の體貌。山のさゝばまひ。水の流き。草木。禽獣。蟲魚。峯石。に至るまで。大に同く少く異ならばる物なし。四肢右の敏なるハ。人の天稟なれども。中にそ稀に左を利しとはるものなり。盡く活物の妙理に

して。人智の測り知るべきにあらざれば。弓射るもの、百發百中なるも。力の限り引撓めて。天に參て發さむに。矢勢竭て地上に落るとき。其遠近必ず所を定むべからざれば。人事すらかくの如し。況造化の天工をや。世の形勢なるも。積善の餘慶。積不善の餘殃は。大に定まるところ。孔子の不遇。盗跖の安佚などは。姑く極らざるところにて。云もてゆけバ皆同じ條理にあらん有ぬべき。安永の往昔（文久三年まで凡八十五六年）本居氏。係辞結辞の古例を考索して。紐鏡詞瓊綸を著し。三條の綱を張り。三轉の證歌を擧ぐ。其他種々の規則を立られども。是を以て盡く推究ることかなはざれば。

変格數種を設て。餘論猶區々なり。文化五年（今年まで凡五十五年）春庭父の活用抄にもとづきて詞八衢を作る。受辞を示し圖をそへ製りて。四種の定格嚴に。其工夫いとめづらかなれども。又三等の変格なり。其後天保七年（今歳まで二十八年）若狹國の僧義門。此二書に就て山口栞を著せり。論説いと細やかなりといへども。只此二書の旨趣を主張するのみにかゝはれて。天然活物の理に心およばざるが故に。往々窮するところ有りて。又疑記數條を存せり。今我此書どもを見て。聊思ふことを云むとせば。詞瓊綸三轉證歌十八段。迄と右まる中迄ゝ左と何りて。古曽と係りて迄

‖ましと結びさる古歌の。一首も無ハいかなる事にか。古今
六帖に「來むといひて去けりしよにも有しかだ流さめ
しも古言まつに流さましに」なる。詞瓊綸に結び辞さへりと。玉の緒操てけに「まは
ましを寫し誤りてまはもしろとせるならんとも思へど。な
なつらくに味ひゝれバ。はまてハ何となくかさそのに
きこゆ。ちそまつに流されるものなれど云意にて。彼を
ざえのそしにふゝまどひけるよとうらむるも云へる
さくひの変格にて「こそ」はとかく、などハ物せしにこそ」に
夜しくれに「こその下をましゝど結ぶハ語格なづらはて
なてづゝなる詞ねきとなりて。なづゝしからぬ故にや。
古き歌どもにをましとのへそ結びさり。はるを詞の玉
の緒にどに。むすび辞さへらどて。いそれさる古今も
あれど。これハましゝといえんよりえなりしまはまるや
うなりて。されぞ行なぶちに。いが古今し栄花物語玉のかゞ
ともきめがさし。此類なほ行る名し」ざて
も「こゝれにし夜流ハかへすにのさあれど泪のこ古言‖

袖にかゝまる‖詞瓊綸にハ上の六帖の歌と並らべ挙て」結び辞さへる歌とせて。操てあにハ袖
にかゝましと有しを寫し誤れるにあらはなら。古れ
そ上のまつにまはまるの並ミハたもそれを。同しこ
なかゞら何と理りハいかさあれど。六帖のまると古と
のましと云等しめぶさうぞれもそる」いと見えさて
云歌なて。諸説區ゝにして一定せば。何ましにも古曾と係
て。礼くと結びさる古今の無きハ。三轉の格の全からら
はなりけて紐鏡の三條と云ハ。右そも‖徒‖徒とかいふも‖ぞのや何なにも‖
そなどいふ辞のおきを‖今うりにかくいふなりの結び一條。中ぞの‖や‖何‖いく‖いかに‖
ましの類ゝの結び一條。左古その結び一條なり。その右ハなる同じ
截断言。中ハ連躰言。ハ。上に係辞なりて。右行の辞どもと同しく。それミ應ぞなとき截断して。
連躰を変ずるハ。言左ハ激する辞。上に古曾なくて。えど
語の躰なる物なり。受れバ已然の辞と

も又使令の辞どもなり。此二種上に古曽あれバ已然使
令の意なし。詞瓊綸に「衣の三條の大づなをざに参り得
てをむすびゝまさらんちゞのてにをそも。そぢくたの
づから。焉えらりに参けるりれて。焉ゆのみされもなう
らむ」是を規則参して。合ふを調さり参し。合ざなをむぶ
衣参ゝ定めさなり。然れど為家卿集に「待ゐけて語ら
ふ声を郭公今年も聞けバまづなげ一のふれ」此卿の頃ハ
時代も後なれバ。若ハ誤にハあらざるか此疑ひなきに
しもあらざれど。萬葉集十三長歌にも「𪫧渡作相語妻遠瓊詞
給にて尓をは違へるに似て違へる同書七に「殊放者奥
にならざる歌の中にも見えたり」ナメそナムの讀誤なら
従酒嘗湊自辺着時尓可放思香」もと本居氏の説なり然
れど古曽なくて語妻と云るも有れバなゐも有りて彼
なるあぢに訓の誤とも云ぶさきなり

為家卿の歌もまつと云勢より激して。自然声となれるに
にて。誤にハあらざるなり。然もあらバあれ然を以へと
まれかくはれされなど意の激せる時ハまへめなど
たの給ふ云るゝものにて。必古曽の勢に應ずる定め
参も云がさく。一格参以ゐてもあてめ参きなり。然さ古
曽ハ三條の中にも殊に重くして。右行の辞に局りさる
格なるを。萬葉集十四に「古呂賀於曽伎能安路許曽要志
母」えしハ詁にて右行の辞あり催馬樂芹「衣ぜりこそゆでゝもうまし」
うはしのしえ是拾遺集長歌「衣ざのき陰とあふぐれん物
も右行の辞なり
見しハ過去の志にて中行の辞蜻蛉日記に
と古曽みし」但し家集にハ衣る見えとあり

「萬代をよばふ山べのゐのこ古曾君がつらふる齢なる
べし」べしハ右行の辞是ら見てさして。左行の格乃故ゝならぬ
を思ふべし。又中の條なるハ紫式部日記に。「多のちかハ
史記の文帝の巻をぞ讀みなるべし」の同書釈にべしもべき
の誤ならむとてなほ
しされど。去云て彼格と云ふもの飽んとしさる葉にて
甘心せば。よむなるきと云物以ひざ海有きくもがら
ざる源氏物語空蝉巻に「たしかにやなきれなり」拾
なり
玉集に「郭公花橋になく声を思ひなしにやきつかしき
かな」草庵集に「くさ深み見えぬ野澤の埋れ水なゝとや
さゝに飛ぶ蛍のなき」新續古今集に「天つ空霜も満ぬる夜
ならてや月に返行く鐘の音かな」道助法親王五十首歌

に「春霞朝たつ袖もをれどや梅咲く山に吹く嵐のな
べしなりのな何なにいづれと係りてありきりつぬに
れも右行の辞
て結ばさなる歌又えも徒の係りにてぬるつるなるける
せぬるゝぬ不去過なとの辞にて結ばさるを。本居氏委
格をして。數多引出さり。實に普通の調に合えば。熟考に
彼三條の大細ハ。古へされ数ふせも。學ぶ者も無く。格など
云ふ者ハ我もれだえば。隨意に云とさるが。如此嚴に定り
多るハ。其辭者も輕重合て。輕く係るが輕く結ぶ。重く係れば重く結びて調
をなしさる自然の勢にて。實に活物のごとくなり。然
くて此に挙さる三條の辭乃混雜せるハ。輕重等しから

ずして調をなしさるにて。是まさ活物の趣を出さぬも
のなり。但しかくのミ云てハ。何と形く得ざりなるべし
やうにも聞えなんか。大方軽重緩急の等きハ尋常なり。
軽重緩急等しからばはして趣を形はも。活物の上に何の
疑ひしき事かあらむ。譬へバ雑劇にさやうなる事ハ志よ
うちならめと上下等しき音声に
云ふハ常の事にてそれなるとえ声を励しにしよしにすなよ
うといひ軽く云なかはも一ツのたもむきなるがまし
強弱緩急ハ萬物の形勢甚しきに至りてハ変格
反對と云ふもの有るなど思ひはえはるし
え。其事の勢ひによりて。辞の軽重を等しめはして。調を形
しなる物と教るきなり。然るを詞瓊綸に「堪能の上にて
ざにいみ稀なる事にて云ミみざるにえよむはしきな

みを知るしと云へるハ甚深の理など含りあらむやうに
聞えて。初學の惑べき云ひざまなるにや。堪能の上ならで
も。重く係りて軽く結び。急に云ひ下して緩にをさめはなに
しと思ふ趣も。されど心にうかむならむ。古へ歌を論ふに。
く。一首の上を見てさして。其論辨無量なり。何のみぞハ無
語格氏遠波など則にあり放ちて。例證などに當て論
ざる事をなのまゝしなし又玉霰に。詞に三ツの云ひざまある事
て。猶下に云ふを見るし
みと云へる條に。「花にほくとみふえ今咲たるをはけるといふ
え咲さると同じくたるにて。咲てあるたるを。咲しといふハ。
前に咲したるを後にいふ詞なり」と云へるえ實に然らで
え育べからざる理なり。俚言にも此格あるにて。行ハ已然

はイツタ。眼前はイク。将然はイコウと云。若此格ならば
むかハ。昨日も今日も明日も其ていさめ無かるべきな
り。然るを日本紀孝徳天皇の巻「阿我柯賦古麻乎。比騰涂都羅武
箇」是は未然を過去れ辞にて讀給へり。又眼前の事をい
へるハ。萬葉集二に柿本朝臣人麻呂「我振袖乎。妹見都良武香」ど
ゐりふるも眼前の格。みつも俚言の見ゟど云に同じくて。後より云格。或本反歌とて挙
さるハ。「吾袂振乎。妹見監鴨」と見えたりけんも過にし事を云辞にてつと
大かた同じ　古今集に「春の野に若菜摘んと來しものを散ゐ
ふ花に道はまどひぬ」同集物名ふりをへてはざふなりと
い花見んと來しをにほひぞうつるさにけり」後撰集春下

「色深くにほひし」と㕝ハ藤浪のたちもかへらで君とは
れ㕝二の是ハ兼輔朝臣の歌なり。集にもにしとゐり家源氏物語胡蝶巻「はせ
の内に根ふかく栽し」竹の子みれのかなゝにや生ゐて
かなるき」是ら來しハ來さる句ゐしハ句ゐさる栽しもうゑさると云意にて過去ら現在にかれよぶ
㕝紀ろにに云辞なり。過去の志るなれと過去し事のミ㕝思ふを委しうらば同書夕顔巻に「ゐ
てつる」御隨身してゐるかをばくゐてつるそあてしと同じくて後より云格なるを御
うさそらの隨身をはして云る又過にし事を眼前のや
も。彼人麻呂の歌と同じきなり
うに云なも。萬葉集一に。「婑女乃。袖吹反。明日香風。京師乎
遠見。無用尓布久」。是ハ藤原宮に遷都の後より云なれバ。
かへしと云されど三の云さ皮に合
も同書二長歌に「嬬之思鳥立」なら也と本居氏云り。
ば嬬之の下命之の二字脱せるもゐる

るべし。天智天皇崩御の後。放鳥の水海にうかべなを。大
后の哭そなへして。ちみ給へるなれども。「オモヒトシと云へど
れば彼ノ格に當らざるを
かくよませたまへり同書三に古之。七賢人等毛。欲為
物者。酒西有良師。」これも古へをさして云へるなれど。彼格に叶さらば。然るを
ホリスルモノハぞ現在の格に云へるを思ふべし又未然を現在の辞にて云へるは
伊勢物語に。「二人して結し紐を一人して逢見ぬまでは
解らじとぞ思ふ」に是も逢見んと云ふべきをかく云り。異本に
會見流左右とかければ。寫誤古今集恋四「かふはでのかさみ
にもあらばあふなきなり
ぞてさそぞゝめけめ泪にうかぶ藻屑なりけり」金葉集
雜上「いそ菜つむ入江の浪乃立かへり君見ぬまでの命と
もがな」是も見るに海松を兼さるなり。何も逢見んと云へる
まで君見んまでの意にて未然なるをかく云へり

古き事のはまと。語勢と。調とに依て。いときはぐなるも
あって。必ず三ッの云はすのまゝなちぬも見えさて。然れど
さて此三ッの云はを等閑にてよしとにかなはらば古今
集春下「春ぞに花の盛りは有なめど逢見んとにとえ命
なりけり」後撰集離別「いれども結びて別るれ
ば逢見んまでは思ひみざるなる拾遺集秋「ぞといせに一
夜と思へど棚機の逢見ん秋の限なきかな」是らは彼ノ大
かに定りさるうしの本居氏のいえゆる常格なり必前に
云ふ如く未然を現在に云ふものと頑に思ひ惑ふべからら
ば猶未に辨べき自他のきをもなるらばるも有り。詞の
ふべきなり
に吹いるを吹いるゝと多くいるり。是も浪のよはるかと
いへるはまと同じくそのいるゝ所をむねといへるかと
て。他に然する案に通路の説いのど。其ノ所を主として云へ
詞の方なり
むとて。然らむとする物なくて。令然の格に云て稱ぶべき

や是皆輕重緩急の勢に依るものにして。實に言語の妙用なり。凡ての詞大方異様なる用法もあらばこそ。稀には、な趣の見えざらざるは。譬へバ冬の季ハ春に近く。春の初ハ冬に遠からねば。かくて寒威烈しきときハ。春に至て堅氷深雪なり。暖氣盛なるをりハ。歳内に春景を催すが如し。言語の用法もさ是に似たるものなり。「ふる袖を見つらん」「なれつる御随身してつりもすの見つ有つるなども過」去の辞ながらいとく輕くして過にし意ハ有り無きの如し。依て古へ格など云事に拘らばして。現在の事に用ひざるなり。春庭此に意著ばして。通路の巻末に此類の詞ども數多書出て「是らもよしなるもあるべけれどもいまだ考へばとおもしさり

どもをりをり故なりて。一様にはあらざれども。語勢にての緩急輕重に依て其變化極り無き理は一なり。語勢と云ハいかなる物ぞと云に。兵家の書に。「激水之疾至於漂石者勢也」となり。物に理外の理ありて來るなどく。多く此勢に依るものなり。其理外のさまの用法を一つ二つ以ていはゞ。後撰集春上「松も引き若菜も摘ずなりぬるを以ゑしり櫻さへやも咲りなん」引きハ引の意 不 源氏物語蛍巻に「人の心破りなやまちはばしき人ハかくこそなりけれ」破りえ不是らハ俚語に「水汲三手鍋モ提ズシテハ云云」破なりなるぞ云が如く。下の詞乃勢にて上の詞乃格を轉ずるなる。萬葉集九に。「入水火尓毛将入跡」下のいらむの将然言を入りも連用言なる

かゝられて上も將然のい
らむの意に轉るハ勢なり」是も同じ趣なれども。其勢輕
綾なるが故に。打讀むに意も著ば。上なるハ其意表裏(ウラウヘ)に
伝へ顛倒しさり。古今集春上「櫻花春くはゝれる年だにも
あかれもせぬい飽(アカ)る、な
人の心にあかれやはせぬ」て然るを飽まちうしと希求
意に脱さるゝ
語勢の一格なり土佐日記に「いのちえかなしき」いのぢえ悲し
き」ハ普通にハ悲しうらぬを云なり然枕冊子よ「いのぢ
るを悲しき事に云ハ語勢の一格なり
「めでさうらぬたやなし」みて
てめでたうらめたやなし」其意聞えさるを「いのぢ」を冠
らせて悲しとれもふたとのた、皆語調の勢に依て。普
ろを強むるも語勢の一格なり
通の物云さ技を傾覆せるた。激水の石を漂ほと同一理
なるものなり。又古今集春上「青柳の糸よりかくる春しも

ぞ乱れて花の綻びにける」しゝえ物を強く云辭なるを。
弥強く云ときは。其意裏へ
るりて。俚言のケツクなどいふ意に實に不測の妙理と
なるなり。此歌のしもハそまなり
云べし。又詞瓊綸に。「れなよそと」の上へ切る、格の辭よ
て受るが定ばりあり切るゝ格の辭とい。ひも鏡と見え
み右の行乃段くの辭なり」
さなはるたぐひあり。然るに詞花集恋「おふもなくくな、」
と思ひし冬の日比心もふなきをりも有けり」と詞瓊綸に
此歌を
挙もして續後拾遺集。風雅集。新拾遺集。等の歌を挙て「右
の歌すうなふの上の受る辭の格さうへり」と云へり如斯
八代集中にも見えされば誤とも定むべうらば。物語書
などにも殊に多かり。其き技に依りてハ。何まにも續けも
も難なきなり。荻原廣道がに疑しぐれにる「るもじの下ゐ
殘る意をふめて似むさしるをと、うけさるにて多
ざにいむをためさる格にそいらば」と云るハ又えつて
強て格と云物を立むとする說にて随ひ難し

も同格のよしなり。されど是も後撰集春下「春来れバ咲く
てふことをぬれぎぬにきするばかりの花にぞ有ける」
新千載集雑中「そむきけむ親のいさめのかなしきにもなる
るバこの里の道を見せぞや」皆紐鏡中行の古ことバどもよ「ことゞ又ぞうことと續きさて
うへなる事ども云ひてゆうばいことおちさく。物ぐるはし
きはまりもなりぬべきなり。かくて近世人のしてたや
すき語格と云ものを熟考ふるに。古の人乃言語に格ある
を。譬バ李候適宜の衣服を着ざるが。其中に四時の品有
るが如し。然るを今の語格を云人ハ。其四時の衣服を暦
日に合せて着るが如く。をりにふれてハ。温凉の肌膚を

冒ほ古ことも有ぬべきなり。適宜ハ疎なるに似て天然に
近く。格より求むるハ。密なるが如くなれども。人事を免
かれざれバ。ことうくにわろそげなる趣を含めり。此さり
もよく〳〵心を用べきなり 小夜しぐれに「歌のことおさめ うゝそゝうゝるそうれなど
にふハ殊に聞ぐるしき故にや。はる例どもかうる古と
なしさればハ格とも格として猶よくはにしへの用ひざは
とを見てさしてわのをべしと云るハ今木のが論ふあらこと
とえ其意異なれども。格ハ格として古へを考へよと云るを。
此学びの確言詞に種々のかさおはきそひ伝るそもこと
と云べきなり
天工の活物なるが故なるさはかり。但かく云てえ詞に霊妙のみ
ら活動をなすやうにも聞えるなんか。萬物の霊なる人身の
性情發見の樞機なれバ。言語それはしても直に天工の活物
と云ひも。大方違ふ萬葉集に「言靈之左吉播布國」ほど事
づうらはるなり

靈之所佐國」形とも有りて。微妙不測の靈に依て。天機の活動いとはまゝなり。されバもとより定格と云ふもの無く。定格なけれバ変格と云ふものも無く。何れもひとつの詞の用法にぞ有けれ。はれど彼ノ大に定まる方より見れバ。巻首に挙るは四種を初め。其ノ法則厳に備り。又妙く極らざる方より思へば。変格其ノ他はまゝにして一定せざれ。如此定まらずして極り。極りて定らざれ。天然の妙理。いとも奇しく。いとも靈しく。口にも筆にも盡いがたらざるなり。漢土の詩にも。二四對。二六不同。其ノ他常格に合ざる事ども共ならざれ。皆大に定まりて共しく極らざる故はれバ此ノ道學ぞむとする人。ゐづく古歌にもいふらむ

古文に慣る、を先務とすべし。格のうさより妙用を求んとするは。真の葩を知らずして。牡丹を描くが如く。ようせざれハ芍薬のやうなる物もいで来ぬべきさまなるかし。

東都書林　山城屋佐兵衛藏板畧目録

日本紀畧 全十三冊	日本後紀 十冊	令義解 十冊
通鑑綱目 阿州板 百十七冊	康熙字典 小本 四十冊	四書集註 十冊
尚書正義 四冊	小學合纂 四冊	小學 校本 二冊
漢魏公全集 十六冊	周易述義 八冊	管子纂詁 十二冊
甘雨亭叢書 五集揃 四十冊	同薄葉摺 帙入 五冊	同別集 八冊
唐陸宣公全集註 十冊	音訓改正四書正文 五冊	遂初堂易論 一冊
歐陽論範 二冊	藝林蒙求 六冊	闢邪小言 四冊
獻替録 三冊	同後編 二冊	劍甲新論 一冊
新論 會澤先生著 二冊	正志齋稽古録 同上 一冊	責難解 同上 一冊

蘇東坡詩集 紀曉嵐批評 十冊　陶淵明集 三冊　中唐廿家絶句 三冊
晩唐詩選 四冊　晩唐詩鈔 十六冊　宋詩選 二冊
眞山民詩集 一冊　宋三大家絶句 一冊　廣三大家絶句 一冊
宋詩清絶 一冊　曾茶山集 二冊　談唐詩選 一冊
王荊公絶句 四冊　李忠定公奏議選 一冊　宗忠簡公文鈔 二冊
隨園文抄 三冊　朱之蕃詠物 一冊　西湖竹枝 二冊
金詩佳絶 一冊　三體詩 横本 一冊　三體詩絶句解 三冊
古今名詩選 一冊　穀堂遺稿抄 四冊　今四家絶句 二冊
栗山文集 五冊　栗山詩集　司馬文正公傳家集選 六冊
寧靜閣詩集 初集 五冊　同 二集 三冊　放翁詩話 一冊

西遊記程 二冊　宋三家詩話 一冊　詰然齋詩話 一冊
徐而菴詩話 一冊　徐而菴雅談 一冊　五山堂詩集 一冊
五山堂詩話 五冊　同 補遺 三冊　同和歌題絶句 一冊
墨林奇標 初集 二集 三集 四集　晩唐百家絶句 五冊　元寇記略 二冊
幼君補佐心得 一志通患 一冊　士道要論 一冊　水雲問答 一冊
近古史談 四冊　孫子合契 二冊　古文孫子 詳略解付 四冊
孫子詳解 十三冊　繪本孫子童觀抄 前編 七冊　同 後編 七冊
四戰記聞 四冊　國朝砲熕權輿録 一冊　武術流祖録 一冊
左傳雕題略 六冊　左傳附注 四冊　左傳補徐 一冊
楊子方言 一冊　孟子約解 三冊　清三朝事略 一冊

三字經 大字 一冊 同 小字 一冊 同 大本 一冊
候鯖一臠 五冊 大學私衡 一冊 東西周考 一冊
心畫軌範 一冊 家田學語 一冊 素餐録 一冊
海外奇談 三冊 海外異傳 一冊 虚字啓蒙 詩用虚字 一冊
繪本古文後集 初帙 五冊 同 二集 三集 四集 五集 羅浮幼質 一冊
神兵稜威考 一冊 同後篇 一冊 訓點考 一冊
活語新論 一冊 人らし鑑 一名波襟集 一冊 神道の山ぶみ 二冊
富士百首 一冊 律居集 三冊 若清水 三冊

加茂翁家集 五冊 同歌集 一冊 同文集 三冊
玉籠集 三冊 武藏野集 初篇 一冊 同 二篇 二冊
貫之類題集 二冊 類題採風集 初篇 二冊 同 二篇 二冊
紐鏡うつし詞 一冊 をきぬい草 一冊 大日本史名称訓 一冊
桂の落葉 初篇 二冊 同 二篇 二冊 後撰集標注 四冊
記紀哥集 二冊
日光山志 五冊 甲斐叢記 五冊 成田名所圖會 五冊
草木育種 二冊 同後篇 二冊 音訓國字格 一冊
君子訓 二冊 童子訓 二冊 養生一言草 一冊
常陸志料 闕城繹史 一冊 常陸志料 郡郷考 三冊 官職通解 一冊

朱子家訓抄　一冊　江戸大節用海内蔵　二冊

靈樞識　十二冊　金匱正義　四冊　本草百種録　三冊

医學讀書記　一冊　雜病廣要　四十　救荒本草啓蒙　五冊

本草圖譜　山草部　四冊　同　芳草部　一冊　療治夜話　二冊

醫餘　三冊　霍亂治畧　一冊　掌中名物筌　一冊

傷寒雜病類方　二冊　日用方物略　一冊　手板發蒙　一冊

麻疹良法　一冊

校正七部集　横本　二冊　芭蕉句集　一冊　俳諧玉葉集　一冊

誹諧礎　二冊　俳諧類題玉詠集　二冊　閣雲愚抄　一冊

一茶句集　二冊　百々人集　二冊　大和詞　一冊

耳比摩利帖　正面摺　二帖　羲之十七帖　一冊　懐素千字文　一冊

子昂赤壁賦　一冊　内閣字府　一冊　同　首書　二冊

廣澤千字文楷書　一冊　同　行書　二冊　同　草書　二冊

廣澤越王帖　一冊　同　醉別帖　一冊　醉銘帖　一冊

東江蘭亭　一冊　同　春晏帖　一冊　同　續　一冊

新撰年表　一冊　掌中新撰年表　一冊　改正蝦夷圖　一折

地理全志 上帙 五冊　同 下帙 五冊　和漢合統 古今字様考附 一折

萬宝玉手箱 一冊　萬宝新書 一冊　同 二篇 一冊

遠西解毒編 一冊　萬國政表 一冊　西字發蒙 一冊

蘭語通 一冊　同 二篇 一冊　同 三篇 一冊

和蘭文典字類 前篇 冊　同 後篇 一冊　蕃語象胥 二冊

英吉利文典 一冊　三語便覧 三冊　五方通語 三冊

英語箋 三冊　同 二篇 四冊　魯西亜字箋 一折

萬國旗章圖譜 一冊　萬國地球圖 一折　萬國方圓圖 一折

扶氏診断 三冊　理學入門 二冊　脉論 一冊

内治全書 一冊　内外科要法 三篇揃 六冊　窊篤兒藥性論 六篇揃 十八冊

氣海觀瀾廣義 五篇揃 合本五冊　遠西奇器述 初篇 冊　同 二篇 一冊

三才正蒙 三冊　量地尺表 附運用發微 二折　射擲表 一折

砲術訓蒙 四篇揃 八冊　施條砲射擲表 一冊　野砲演習式 一冊

山砲畧説 一冊　遠西武器圖畧 一冊　遠西記略 二冊

合衆國小志 二冊　琉球入貢記略 一冊

頭書講釋 和漢朗詠集 二冊　野馬臺國字抄 一冊　須彌山圖解 一冊

田文錦字詩抄 一冊　群蝶画英 一冊　将棊駒ならべ 二冊

量地必携 一冊　八部秡 一折　櫟甲圖哥 一折

大學 道春點 一冊　中庸 道春點 一冊　正信偈 一冊

千字文　一冊	四書字引　一冊	同捷徑　一冊
御成敗式目　一冊	實語教　一冊	同かな附　一冊
商賣往来　一冊	同かな附　一冊	同中本　一冊
初學古状揃　一冊	百人一首 中本　一冊	同半紙摺　一冊
女今川操鑑　一冊	小野篁　一冊	旅中懐宝　一折
袖玉道中記　一冊	同増補　一冊	下總圖　一枚
年代重寶記　一枚	松島圖　一枚	俳諧名掌題繪　一枚
省文露抄　一枚		
古状揃 猪瀬先生書　一冊	實語教 同書　一冊	商賣往来 同書　一冊

發行書林

京都三条通松原下ル　勝村治右衛門
大坂心斎橋北久太郎町　河内屋喜兵衛
同南壹丁目　敦賀屋九兵衛
江戸芝神明前　岡田屋嘉七
同　和泉屋吉兵衛
銀座三丁目　山城屋政吉
日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　二丁目　須原屋新兵衛
横山町三丁目　和泉屋金右衛門
淺草茅町　須原屋伊八
日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛梓